はまなす

第119号　令和６年２月22日

＜特　集＞
個別最適な学び・協働的な学びに向けての取組　（２面）
＜青年研修会報告＞
佐和田中学校　石　川　直　人　（３面）

賀

これまでも、これからも

金井中学校
雑賀　裕

一　はじめに

令和六年能登半島地震で被災された皆様へ、心からお見舞い申し上げます。また、大切な方々を亡くされた皆様へ、謹んでお悔やみ申し上げます。

二　「志」の継承　未来へ

「進化、深化し続けるときわ会の真価を問う」として、ときわ会創設百五十周年記念式典が行われました。多くの会員が集い、先人達の功績からこれまでの歩（志）を学び、そして、仲間たちと、これから（未来）について語り合い思いを馳せる機会をもつことができました。

事前研修では、全県を対象として校種や年齢等、オンライン研修だからこそ実現した新たな関わり合いがあり、大変有益な研修となりました。

式典のクライマックスでは、シンガーソングライターの佐藤ひらりさんから歌のプレゼントがありました。「ジュピター」から「ときわプライド」へと紡がれるうちに、彼女の歌声に引き込まれ、胸の高鳴りと人目を憚らず涙する自分が居ました。あの心地よい衝撃は忘れられません。

三　「こと」の議論

新型コロナウイルスの扱いが五類相当となり、以前に近い日常が戻ってきた令和五年度でした。

学校現場では、「元に戻すこと」「新たに創出すること」「修正すること」「やめること」等々。各学校でそれぞれの立ち位置から、「こと」について様々な議論が為されていることと思います。

“そもそも（論）”という考え方があります。私は思考の柱にしています。働き方改革推進の視点からも、「活動あって成果なし」に陥っている活動はないでしょうか。

このことは、単に活動を否定するという意味ではなく、主たる計画理由が前年度踏襲となっているところに問題があると思います。立案者は、「なぜ」とか「何のために」という疑問を持ち、自問自答しながら取組のクオリティーを高めて行くことが求められていると思います。

四　日々前進

「着任したら、一年目は見習いのつもりで、二年目は分かったところから自分の考えをもって、三年目からは恩返しのつもりで務めなさい」。若い頃、先輩に教えを受けました。「そうありたい」と頑張るほど、周りから助けられている自分に気付かされます。最近は、「それでいいのかな」とも思います。

ときわ会は、感染症禍にあっても『生々発展』の精神で歩み続けています。私は、この仲間が居るから日々前進できています。

（昭63）

はまなす抄

○○しようぜ！

河原田小学校
野上　孝

メジャーリーガーの大谷翔平選手が全国の小学校にグローブを寄贈した。「野球に興味をもってほしい！」「野球を楽しんでほしい！」そんな思いからとのこと。当校でもお披露目した日、子どもたちは目を輝かせ大喜びだった。子どもたちに夢を与えるとても素敵な取組だと思う。

さて、メッセージの最後にあった「野球しようぜ」の言葉。この「野球」を「○○」としたら、私たち教師はどんな前向きな言葉を入れるだろうか。「研修」「教材研究」「コミュニケーション」「働き方改革」…。仲間同士、あるいは、自分自身を応援・鼓舞するために、日々前向きな言葉を入れながら、教師としての勢い・実力をつけたいものである。

さあ、○○な教師になろうぜ！

（平３）

〔特集〕個別最適な学び・協働的な学びに向けての取組

『個別最適な学び・協働的な学び』の一体化を意識した単元構成の工夫」

高千中学校
小田和也

私の課題として、一斉指導型の授業が多いことにより、生徒が思考力・判断力・表現力を発揮しにくい、他者との対話を通して考えを広げたり深めたりしにくいということがある。そこで、これらを解決するために「個別最適な学び・協働的な学び」の一体化を意識した取組を行った。

社会科の目的は、「生徒が社会的な見方・考え方を働かせ、思考力・判断力・表現力を高めること」と認識している。これを実現するため、単元の中で「個別最適な学び・協働的な学び」の位置づけを工夫した。

「個別最適な学び」に関しては、一次（単元導入段階）に単元を貫く学習課題を設定し、自分なりの予想やどんな知識が必要になりそうか問う。こうすることで、生徒は目的をもって二次（知識獲得段階）の学習を進められる。三次（課題解決段階）では、獲得した知識をもとに考えを構築する場を設ける。タブレット、ホワイトボード等の活用も個々の表現方法に合わせて自由に選択できるようにした。

「協働的な学び」に関しては、一次～三次を通して、常に他者と対話する場を設ける。特に、二次では獲得したどの知識が単元を貫く学習課題の解決につながるのか他者との対話を通して明らかにしたり、三次では常に他者と対話できる環境を整え、探索的な対話ができるようにしたりした。

これらの実践を通して、生徒の思考力・判断力・表現力の高まりを感じている。また、「難しかったけど楽しかった。」「友達の考えから新しい気付きがあった。」といった声が生徒から聞かれた。

今後も、生徒の資質能力を高めるための「個別最適な学び・協働的な学び」を実現できるよう、授業改善に努めたい。

（平23）

「最適を目指して」

加茂小学校
吉田　航

感染症の流行による影響は、誰にとっても忘れ得ぬ衝撃であったことだろう。抱えた悩みは、時間の経過、状況の変化によって凪いでいったのであろうか。誰もが困難な状況を迎えた中で、私にも消えぬ、消してはならぬ痛みが生じた。

「授業は楽しいですか。」感染症による影響が始まった年の、一学期末の児童アンケートの項目である。子どもたちの回答は、軒並み否定的であった。理由は明らかである。「子ども同士の交流を避けた」ことだ。

このままではならない。では、かつてのスタイルに戻せるのか。そうはいかない。当時抱えた痛みは、私を原点に立ち返らせるとともに、未来を生き抜く術を模索させ続けている。目の前の子どもたちに適した学びとはどんなものだろうか。

かつての衝撃から日々を過ごす中で感じたのは、「個別最適な学び」の「最適」の部分である。子ども自身に選択させた方法が「最適」であるとは言い難い。だからこそ、様々な方法を体験させることが必要だ。個人解決、仲間を頼る、仲間に伝えることを通して理解を深める、インターネットの活用等、挙げていけばキリがない。答えのない「最適」について、子ども自身に委ねられる選択肢を与えていくことが肝要だ。もちろん、時には子どもの選択に口を出すことも大切であり、「個別最適な学び」は、子ども自身が見つけていくものでもなく、教師が押し付けるものでもなく、相互に練磨する中で見つかるものであると考える。そして、子どもたちの選択肢に、「仲間とともに学ぶ」ということが必須項目となるような学級を創っていきたい。

（平24）